

ソードアート・オンライン ～紫紺の黒猫～

☆さくらもち♪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2022年11月6日にとあるゲームが正式開始した。

ゲーム内で死ぬと現実世界でも死ぬ、というデスゲームに参加してしまったプレイヤー1万人。

そのデスゲームにて過ごす少年は、このゲームで何が変わるのだろうか。

※見切り発車での作品でしたが、完結致しました。

目次

孤高の黒猫	1
一匹猫	6
美しく咲く黒い猫	14
自分という存在	22
《黒猫》と少女	28
朱に染まりし明朝の刻	37
血に濡れ散る狂い猫	45
独り淋しい黒猫	58
初恋少女は色恋染まる	67
紫紺の黒猫	81

孤高の黒猫

酷く血生臭い匂い。

人々が生活している国とは思えないそれは、国家としての闇。
燃え盛る炎に一人だけ生きていた子供の姿。

「あ……う……」

呻きのような声を上げるも、助けなど感じれない。

生きているのが不思議なぐらいに。

「……あ……」

生気を感じさせない瞳から流れた涙は。

熱い炎によって乾いていった。

2022年11月6日。

世界は初めて「仮想現実」《VR》を可能にした。

天才物理学者が作り出したそれは、世界を大きく震撼させた。

そして仮想現実を実感出来る物。

身近・・・とは言えなかったものの、それを体験したいと思う人は多かった。

仮想現実という世界で、MMORPGとして売り出されたゲーム。

『ソードアート・オンライン』というゲームはβテスターを含めた一人だけが手にすることが出来た。

自分が早く仮想現実を体験できると思った人々が手に取り始めたゲームは。

地獄の、ゲーム内で死ぬと、現実世界でも死ぬというデスゲームだったから。

ソードアート・オンライン、通称SAOと呼ばれるゲーム。

そのプレイヤーの一人である、『Y^ユu^キ』は何も変わらない日常をSAO内で過ごしていた。

誰とも干渉を行わないように。

「ん・・・」

優しい風が吹いてユキの長い髪の毛がチラチラと視界内に入る。

「む・・・」

耳にかけたかったが、今の恰好は怪しさ満点のローブ状態。

手を突っ込もうとしてもかけずらいので結局そのままにしていた。

ぼーっとしてしているとメッセージが飛んできた効果音がユキに聞こえる。

「ん、誰、だろ」

誰だろうと確認すると、送信者は『A r u g o』と書かれていた。

SAO内では名を知らぬ者がいない程有名な人物で、それは上級者から初心者にまで。

当然ユキも知っていて、なんならやり取りぐらいはしていた。

内容を確認すると、実に面倒な文面だった。

元気にしてるか？

オレっちは絶剣や閃光とかの情報要求が多すぎて疲れちゃうヨ！

それは良いとしてだナ。

実は異名持ちお二人がユキ坊に会いたいらしくて何度も頼んで来るんだ。

拒否するなら言っておくヨ。

—————

絶剣と閃光。

この二人は有名なんでものじゃない。

関われば要らぬ厄介を招くし、会いたくない。

異名ならユキ自身も持っているが、それでも逢瀬はしたくないのだ。

「・・・お断り」

そう旨をアルゴへと送ると了解と返ってくる。

今もなお問い詰められているのだろう。

何故その二人がユキに会いたいのか分からない。

だが、関わるのは危険と勘が言っていた。

「はあ・・・」

風に吹かれながらも、ユキは一応どんな人なのかこっそり見に行った。

一匹猫

第五十層アルゲード。

商店が集い、S A O内でも屈指の商売層になりつつある階層にて人目を引く人物がいた。

S A O 攻略組の筆頭格。

閃光のアスナ、絶剣のユウキ。

異名持ちプレイヤー二人が入った商店は顔見知りの場所だった。

「こんにちは、エギルさん」

「こんにちは！」

「おお、アスナにユウキじゃねえか。今日はどうしたんだ？」

店の奥から出てきたのは180cmほどある背丈に黒い肌という特徴が印象強い。

この五十層アルゲードに店舗を構え、商売人と攻略組の二つの顔を持つ人物だ。

「今日ここで待ち合わせなのよ。アルゴさんとね」

「なるほどな。だが、俺の店を待ち合わせにするのは止めてくれ」

「ほら言われちゃったよ？アスナ」

この異名持ち美少女二人と気兼ねなく会話できるのも元々パーティーを組んでいた事や共通の知り合い等もあり、同じ攻略メンバーからというのもあった。

何気ない雑談をしていると来客を知らせる鈴がカランコロンと心地好く鳴り響く。

「らっしやっ」

「ん．．．」

入ってきたのは、怪しげにもローブを着込んで姿が殆ど見えないプレイヤー。

顔を覗こうにも身長が160cmもない為に、見下ろす形になる為に、エギルやアスナ、ユウキは分からなかった。

「買い取り、出来る?」

「ああ．．．買い取りか。物によるが．．．」

どこか危険を感じる。

そんな第六感的な物が働く三人は警戒を解けなかった。

そんなことも露知らず、ローブのプレイヤーはストレージから一つのアイテムをエギルの前に置く。

「こ、これって．．．」

「お、おいおい．．．こりゃあ．．．」

「ね、ねえ!君!」

「・・・なに?」

アスナやエギルが驚く中、ユウキは先程のアイテムを取り出したプレイヤーへと駆け寄る。

「そのアイテム、ボクに売ってくれないかな!」

「・・・良い、けど」

元々売りに来た立場の為、相場通りに売却出来そうなら誰でも良かった。

「相場、通りに」

だが、その値段が一番厳しい物となる。

ユウキへと提示された要求金額は攻略組として活動しているユウキですら支払えるギリギリの額だったのだから。

「う・・・ま、まけてくれないかな・・・?」

「・・・じゃあ、無理」

取り付く島もない、と判断するとユウキは提示された金額を支払った。

その額は「1, 850, 000コル」という馬鹿げた金額だった。

「ん・・・」

「ありがとう!助かったよー!」

「別に・・・」

プレイヤーは用件が済んだ為、店を立ち去ろうとする。

「なあ」

「・・・なに」

それを店主であるエギルが止めた。

その理由が分からず、プレイヤーは思考するが。

「さっきの。ありゃあ上級者ですらお目にかかれない一級品だ。それをどうやって手に入れたんだ？」

「・・・」

「別に怪しいとは思っちゃいない。個人的な興味だ」

「・・・普通に、取っただけ」

プレイヤーはそう言うのと店を出て行った。

返答を聞いたエギルは「そうか」と呟くと商人の顔付きへと戻った。

先程、商人プレイヤーの商店でアイテムを売ったプレイヤーは後を付けられていないか確認をすると、少し休憩を取った。

「は、ふ．．．」

あんな人物が異名持ちになるんだなと考えながら、さつき売ったアイテムを思い出し
ていた。

先程売ったのは超低確率ドロップの鉱石系アイテムで、相応の技術がある鍛冶屋に渡すと一級品の片手剣や細剣が作れる物だった。

それ以外の武器は製作すら出来ないが。

「武器の、交換、か」

大金をはたいてまで買ったのは武器の新調だろうと考える。

それぐらいにしかあの鉱石は使えない。

資産としても、アイテムとしても無駄だし、邪魔だ。

「おーっす、ユキ坊」

「ん……」

考えていれば、隣には顔見知りの相手があった。

「ユーちゃんやアーちゃんに会ったみたいだな。どうだった？」

「……特に」

「そうカー……」

「何か、用？」

ユキの口調こそ冷たいものだが、その言葉に隠された本質を見れば何も思っていない事がわかる。

しっかりと感情が入っているが、それを上書きするように隠してしまうのがユキの癖でもあった。

「タイタンズハンド、知ってるか？」

「……一応、は」

タイタンズハンド。

ユキが調べ尽くしているもので、その手でなければ知ることもないオレンジギルド。

S A O 内では殺人は立派な犯罪で、殺人を犯すとプレイヤーのカーソルカラーがグリーンからレッドへと変わる。

だが、犯罪と言っても重度から軽度とあり、オレンジは軽度〜中度といった犯罪レベ

ルの指標。

「このギルドの被害がそこそこあってナ。ユキ坊ならどうするのかと思っただ」

ユキは覚えているかぎり、知るかぎりの情報を記憶から引き出す。

常人とは掛け離れたユキの思考能力は人外とも言える恐ろしさ。

それを利用して今タイタンズハンドによる被害を思い出す。

「・・・中層プレイヤー。あのギルドは、中層活動だから。それを考えて、中層の・・・

《竜使い》辺り」

今までの被害や、標的の傾向を搾り、思考の果てに出てくる答。

それを伝えた。

「・・・さすがだナ。その頭、オレっちにも欲しいぐらいダ」

「・・・で、なんでそれを」

ユキは聞いたかったのを聞き出す。

何故その話題を自分にしたのかを。

「ユキ坊にも協力してもらえないかなーというオレっちの行動だヨ」

「・・・そう」

もう聞くことはないと思つたユキは立ち上がるとその場から立ち去る。

「はあ・・・」

面倒、とばかりに出てくるため息。

しかしオレンジギルドに伸びていく手は何色だったのだろう。

美しく咲く黒い猫

スタスタと急ぎ足で街を移動していくプレイヤー。

それはロープにより姿が見えず、人物の特定には至らない。

「転移、第四十七層」

転移結晶により、プレイヤーは姿を消す。

一瞬にして景色が変わると美しい花が咲き誇る階層。

第四十七層の主街区フロリアは、SAO内で順位を争うデートスポットの一つ。

「・・・いい、な」

男女のカップルが楽しそうにしているのを見て羨ましく思えてしまう。

「・・・行こう」

だが、それを見続けていると自分自身が虚しく感じる。

それが嫌だったのか、すぐさま行動に移した。

ロープが着用状態だと移動面に不便があるが、それでも姿を見られたくない為に外せなかった。

「プネウマの、花・・・だから」

該当するのは最北東端。

そこにプネウマの花というアイテムが手に入る。

ビーストテイマーであれば誰もが羨み、欲しいといえる従魔蘇生アイテムだった。

「ふっ……」

スキルによる常時ステータス補正、装備補正、元のステータス。

それらが全て見事なまでに噛み合わさり、異常速度で駆けていく。

視界に移る景色がどんどん変わっていく。

それでいて、攻略組筆頭レベルでなければ見抜けない《隠蔽》。

「わわ……」

あつという間にプネウマの花がある北東へ辿り着くと、何名かのプレイヤー反応が

あつた。

「……ん」

記憶から該当プレイヤーを検索し、対象と照らし合わせる。

「……ふふっ。大当たり」

妖しく笑ったそれは、見れば人を惑わせるだろう。

姿が見えなくともその人物から醸し出される雰囲気やオーラはごまかせない。

「早く、早く」

もう待てない。

それが思考に浮かび上がる。

オレンジギルドが先に行動したようで、その行動を件のプレイヤー達が警戒する。

「・・・少しぐらい、良いよね」

腰にずつと付けて、最近ではあまり振るってあげなかった自身の愛刀を。

ソードスキルなんてもの存在しないように。

ただ自分が現実世界でも同じようにした感じで振るった。

「ひっ!?!」

「誰だ!」

向こうのプレイヤーには気づかれていなかった。

ただ、向こうのオレンジプレイヤーは全員両手を斬り飛ばされている。

「あははっ」

子供がおもちゃで遊ぶように、ゲーム内であろうと大人の手を簡単に斬る。

それがどれほどまで異常なのか。

適当に放り投げた回廊結晶がオレンジプレイヤー全員を牢獄へと転移されるのとただ

見ていた。

「・・・動いた」

それに合わせてすぐさま行動をした。相手はSAO内唯一のレッドギルド。

棺桶が笑うというのなら。

自分自身がその棺桶ごと破壊し尽くす。

気付かれないよう、相手に張り巡らせたワイヤー。

それをクイツと引けば。

「うわっ!？」

「これ、は」

「・・・ツチ」

笑う棺桶主要メンバー3人。

危険プレイヤーにাগり、捕まえることが不可能に近かった人物がいと簡単に捕ま

り、日に晒されていた。

「・・・つまり、ない」

そう呟くと。

一人のプレイヤーの胸から刀が突き出る。

「なっ・・・!？」

相手にそれを悟らせないよう。

そして、すぐにHPが無くなったのか、ポリゴン片となり砕け散る。

「誰だ」

「《黒の剣士》、《絶剣》、《閃光》・・・異名持ち3人」

自身の戦闘力を総合的に分析。

相手との技量や思考能力を分析。

勝てる勝率を導き、出されるのは必敗。

「手、出さない、でね」

それは警告。

出せば容赦しないという優しさを。

そして早くのんびりしたいという怠惰さも出てきていたが。

「レッドギルド、こんなもの?」

「くっ・・・」

「まさかだなあ・・・」

「つまらない、ね」

刀を振り、適当な切り傷を。

だがあまりの攻撃力だからか、少しだけの傷ですら大幅にHPが削れていた。

「・・・・・・ここで会うとは思わなかったぜえ? 《黒猫》」

「・・・そ」

《黒猫》と呼ばれたプレイヤーは、ただそれを聞いて眩くだけ。

自分自身の異名など興味がなく、それに対する誇りもない。

ただありとあらゆる手段を用いてSAO内にて被害があるオレンジを潰している一人のプレイヤーにすぎないのだからと。

「《黒猫》だどっ・・・!？」

「あの・・・キリトさん。黒猫って・・・?」

「シリカちゃん。黒猫は・・・プレイヤーキラーキラーっていつてね。オレンジやレッドを潰しているプレイヤーよ」

「・・・え・・・?」

驚愕、怯え。

恐慌にもなりうる《黒猫》というプレイヤー。

オレンジプレイヤーやレッドプレイヤーを容易に潰せることから、攻略組からすると最も危険なプレイヤーに上がっていた。

笑う棺桶というレッドギルドをも今キリトやシリカの前で幹部クラスを殺している事からも、それが実証されている。

「・・・疲れた。早く、死んで?」

抑揚を感じさせない声で言う。刀が振られる。

だが、振り下ろす前にただ一言。

「無明剣」

そう呟かれた言葉を聞き取れたのは誰だろう。

あまりにも小さな声故に殺される目前のレッドプレイヤーしか分からないだろう。

あつさりと刀が振られ、アバター体が両断されると興味がなくなったように立ち去ろうとする。

「おい」

「・・・なに」

「あんた・・・何者だ？」

「・・・どうでも、いい」

心底どうでもいい、と答えると黒猫はどこかへ立ち去って行った。

「・・・アスナ、ユウキ、シリカ。戻ろう」

キリトの声に全員が頷く。

今日の起きた出来事は、無駄には出来ない。

危険プレイヤー《黒猫》との接触がほんのわずかだろうと危険性がどれほどか分かったために。

それを攻略組全員に通達しないければと動くのだった。

自分という存在

何気ない日常を謳歌するため。

ユキはのんびりと街を歩いていた。

姿を隠すためにローブは着ているが。

「ん．．．」

人目が自身に過度に集中しなければ、そこまで人に対する気持ちも薄れていた。ほとんど他人に対する興味がなくなってきたからだろう。

人を殺す事になんの感情も抱かない。

そもそも他人に抱く感情がなければ、その行為に対する悪感情もない。

「．．．誰、か．．．来てる．．．？」

だが、ユキの中で最も強く感知する感情。

敵意、悪意、殺意、嫉妬．．．。

人間が持つ感情でどろどろとしたものは何故か分かってしまう。

「．．．面倒」

天才的な頭脳。

悪魔的思考能力。

人間でありながら、人間らしくない自分。

そんな存在だからこそ誰も自分じゃなく、その能力だけを求める。

故に人間らしさを捨て、機械的にも成り果てかける。

そんな自分自身が脳内に掠める。

そこにユキ本来の意志はなく。

ただ人形として扱われる。

「・・・誰」

自分の跡をつけているプレイヤーを誘導し、一瞬で愛刀を首元にそえる。

「っ・・・」

相手もローブを着ていて姿が見えなかったが、チラチラと見ながら歩き方や、仕草な

どを全て覚えていた。

今ここでユキが見逃して圏内から出た瞬間暗殺も可能となっていた。

「・・・(ぎゅ)めんよ」

ユキから発された殺気の中、からがらに出した言葉は跡をつけたことへの謝罪だった。

その言葉に含まれた反省や、武器を首に当てられている事からの不安、恐怖が取り巻

く。

「・・・そ」

当てていても何も変わらないと判断すると、刀を鞘へ納める。

現実離れた抜刀の無駄の無い動きは興味深く感じるだろう。

だがそれはユキの現実でのたゆまぬ努力や、生まれ持った才能やセンスによる補正が大きい。

「ごめんよ。君だつていう確証がない状態で後を付けていたから・・・」

「別に。どうでもいい」

面倒だから早く用件を言え。

そんな雰囲気をずっと出していた。

だが他人だろうと、自分へ何か要求をしたいという人間に今までユキは心底うんざりしている。

まともな者などいないと決め付けてしまう程には。

「・・・で？」

「あつ・・・う、うん。今時間あるかな・・・？」

「・・・時間は」

普段から暇を持て余しているが、正直関われば面倒事があると警鐘が鳴り響く。

だがこの退屈な日常を変えてくれるのでは、と一途の希望もあった。

「内容、次第」

「内容かあ・・・うーん・・・」

面白いというより、興味が出れば。

そんな感じで聞いた。

まさか真剣に悩んでくれるとは思っていなかったみたいだが。

「むー・・・」

「・・・ふふっ」

「どうかした？」

「・・・いや、真剣に、悩んでるから・・・」

ここまで悩むのかとそんな今でなければもう無理かもしれない相手からすればそうなのだろうか。

ユキにとつては少し面白く感じた。

だからこそ興味も出る。

S A Oプレイヤーなんかじゃなく、今ユキの目の前で真剣に悩んでいるプレイヤーに。

「もう、いいよ」

「あ……ごめんね？何も思いつかなくて……」

「別に……」

ユキのフレンド一覧には一人だけしか表示がされていない。

SAOの情報屋ではトップクラスであるアルゴ。

「……名前、何？」

「へっ？ボク？」

「ん……」

名前が分からなかったので、聞いた。

一応ユキの記憶から該当するプレイヤーが推測されているが、こういうのは本人の口から聞くのが一番だろうと。

「ボクはユウキだよ」

「……似てる、ね」

ユウキと教えられて少しだけ嬉しく思いながらユウキにフレンド申請を送る。

「ふ、フレンド？良いの？」

「ん、嫌なら……良い」

「ううん！なる！」

すぐさま承諾され、ユキのフレンド一覧に一人増える。

そこにはアルゴ、ユウキと表示されて。

「要件、思い出したら。送れば、いい」

そう言い残すとユキは足早に立ち去る。

あのまま居れば何すれば良いのか分からなくなっている自分が怖くなった。

「あ……分かった！ありがとう、ユキ！」

「……ん」

ちゃんと自分の名前を呼んでくれる。

ゲームの名前でも、ちゃんと自分自身を見てくれる。

現実世界への帰還が少しずつ遠くなっていた。

帰還すれば、また自分じゃない自分を求められて。

「……やだ、なあ……」

誰でも良いから、ちゃんと自分を求めてほしい。

そんな願望がどンドン膨らんでいった。

《黒猫》と少女

SAO内でトップギルドに数えられる一つ、血盟騎士団。

そのギルド内に集められているのはSAO攻略組メンバー。

異名持ちとして名も高い人物も当然ながらその場にいた。

血盟騎士団副団長《閃光》の『アスナ』。

ベータテスターであり、攻略組トップクラスの戦力である《黒の剣士》『キリト』。

仮想空間でありながらも、現実世界のように異次元めいた動きと戦力がある《絶剣》

『ユウキ』。

唯一SAO内で公表しているユニークスキル持ちで、血盟騎士団団長《神聖剣》『ヒー
スクリフ』。

相応足るメンバーが今攻略組筆頭格として集まり、今回の件についての会議が行われ
ていた。

「今回皆さんに集まっていたいたのは、SAOが始まってから問題になりつつあるプ
レイヤーへの対策及び捕縛・・・となります」

進行をアスナが務めており、開始時から攻略組の問題を取り上げていた。

「異常な程の攻略スピードで、攻略組よりも先に階層を制覇しているプレイヤーが当然ながら存在もします。ですが、それは下層であれば数名ほどで出来た場合もあります
が……」

「確かに。先日、攻略組が関与していない状態での階層制覇。これは攻略組の存在意義と共に、それを成し遂げたプレイヤーは俺らよりも強いんだよ」

「はい。その人に攻略組として入ってもらえれば良いのですが、恐らく不可能に近いと思われれます」

「ふむ……何故かな？アスナ君」

それまで話を聞くだけで、何も言わなかった団長ヒースクリフが興味を示す。

「そのプレイヤーは……恐らくですが《黒猫》。数あるオレンジ、レッドプレイヤーを悉くキルしているP K Kプレイヤーです」
プレイヤーキラーキル

P K Kは相手よりも実力が上でないと成せない一つ。

当然ながら殺人を犯すためにS A Oでは忌み嫌うが、その存在を真つ向から否定も出来なかった。

オレンジやレッドによる被害者は多く、それゆえにP K Kを行う《黒猫》は下層・中層のプレイヤーには有り難みなどもあった。

また、支援などもしている為に作戦を考え、実施もしようとするれば下層・中層のプレ

イヤーの反感も有り得るとの判断になっていた。

「ふむ。その《黒猫》なるプレイヤーが何故捕まらなければならぬ？その理由を説明できるとかな？」

「それはっ！」

「アスナ君。君が言っているのは攻略組や上層プレイヤーの範囲内だ。だが件のプレイヤーは下層や中層からの信も厚い。そんな人物を捕縛したとなれば攻略組の信用も落ちると思えるが？」

「・・・そう、ですね」

「アスナ。ボクが、やってみるよ」

そんな中、ユウキは意見を言う。

ユウキは以前に偶然ながらも《黒猫》と会話をしてフレンドの交換もしていた。

そのため話をしようと思えばユウキは出来る状況だった。

「ユウキ・・・？でも、どうやって会うの？」

「そ、その・・・以前に見つけて後を付けたんだよ。その時に会話もしてる」

「なっ?!危険じゃないか！」

「そうだけど！現状は何も変わらないでしょ？だから会えないか聞いてみるよ」

ユウキはすぐに会えないかメッセージを飛ばす。

数秒もすれば大丈夫と返ってきていた。

「会えるって。ボク行ってくるよ」

「ダメだ。行くなら俺かアスナも連れて」

「・・・それだと会ってくれないよ」

あれほどまでに人と関わることを避けている人物に無断で自分以外を連れていける気にはユウキになかった。

せつかく得られた興味をここで失ってしまうのか何故か嫌だったのだ。

「とりあえず！ボクもう行くからね！」

ユウキは扉を勢いよく開けるとギルドを出て約束を取り付けた場所へと向かっていった。

「アスナ君。キリト君。今は手を出さないでおこうではないか。彼女が一人でなければ
と言うのなら」

「・・・そうですね。分かりました」

「くそっ・・・」

《黒猫》対策会議は終えて、一人で件のプレイヤーへと向かっていったユウキをただ心配するだけだった。

ギルド本部を勢いよく出ていった紺色少女。

ユウキは親友であるアスナとキリトに心配されていたのは分かっているながらも止められるのが嫌だった。

「まったく・・・ボクは子供じゃないのに」

だがそれで怒っていれば今から会う人物に影響があるかもしれない。すぐに忘れようと転移門へと向かおうとすると。

「ユウキちゃん？ほら、あの《絶剣》の」

「へ？そ、そうだけど？」

「今ソロかな？なら俺らとパーティー組まない？」

ユウキに声をかけたのは世間ではチャラ男になる男性。

嫌とは言いにくいだが、ユウキには約束があるため早く行きたかったのだが。

「ボク今から人と会う約束してるんだ。パーティーはちよつと・・・」

「じゃあその子も一緒にいいから！一緒に組もう？」

「え、ええ・・・」

早く行きたいのにも関わらず引き止めて来る男性にユウキは困惑と苛々が募りはじめ。

そして約束の人物を待たせているためにその不安も重なる。

だが、それはすぐに覆された。

「転移」

「ふえっ？」

ユウキの手を急に誰かが掴み、転移結晶でまとめて転移された。

相手が誰なのか警戒しながらも、転移のエフェクトがなくなるとすぐに距離を取った。

「・・・遅い」

「ゆ、ユキ？」

「ん・・・」

どこか拗ねているように言いながらもユウキの前に立つ。

その相手は今SAO攻略組から危険性があるプレイヤーとして認識されているPKプレイヤー《黒猫》であるユキ。

そんな相手が何故、と思いつながらも警戒を解いた。

「有名人は、大変、だね」

「あはは・・・ボクとしては勝手についてるから何とも言えないんだけどね・・・」

「ん、で。何の用、だった？」

「ここじゃ言いにくいから・・・どこか良いところないかな？」

「ん・・・宿で、良い？」

「大丈夫、構わないよ」

普通ならば宿などで了承しないが、この時のユウキは警戒を解いたばかりでそこにまで思考が回っていなかった。

ユキが泊まっている宿屋に着くとすぐに部屋を取って中に入る。

「お、お邪魔します・・・」

「ん、宿屋だけど。どうぞ」

ユキはローブを一度外す。

今まで誰も姿を見たことがなかったその容姿を。

ユウキは目の前で。

「あ……」

「ん……はふ……」

「綺麗……」

「これ？」

ユウキが注目している視線を辿ると自分の髪に集中していたので、自分の髪を一房取って見せる。

女の子であるユウキから見てもそれは美しいと感じる容姿。

腰まで届く長い黒髪に日に照らされれば反射もしていた。

だが光全てを吞めてしまうのではと思えるほどに綺麗な黒色。

「触っても良いかな？」

ユウキのそれを聞き入れるか悩むユキだったが、まあいいかと考え、触りやすいようにユウキをベッドに座らせるとその膝に乗っかる。

「ゆ、ユキ!?!」

「んっ……触る、なら」

触っても良いのだと理解するとユウキは恐る恐る綺麗な黒髪に触れる。

「ふわあぁ……」

思わず声が出てしまうほど、手触りがよく、指の梳き通りもよかった。サラサラとしており、ずっとこの髪を触っていたくなるほどに。

「んう……」

ぽすつとユキが力を抜くと、ユウキはずつと髪を触りつづけていた。

そんなことをしているといつの間にかユキは小さいながらも寝息を立てて寝てしまっていた。

「ユキ？」

ちよつとやさつとじや起きなさそうと判断すると、ベッドに横倒す。

自分はどうしようかとユウキは考えるも、寝ているユキを見ていると段々と自分にも眠気がやってきていた。

「……良いのかな」

少し悩みながらも自分に身体を預けてくれたことを考えて、一緒に寝てしまおうと思考する。

「……おやすみ、なさい……」

窓から差し込む月光りが二人を照らす。

人でないほどに美しく、それでいてお互い安心したように寝てしまっていた。

朱に染まりし明朝の刻

早朝とも言える時間。

ベッドにて目を覚まし身体を起こしているのは《黒猫》としてPKKプレイヤーと危険視されている人物であるユキ。

そして、ユキの隣では一緒に寝ていたのか《絶剣》のユウキがスヤスヤと寝ている。
「ん……」

珍しく今までにないほど安心感で包まれて眠れた事に少し戸惑いながらも、心地好い睡眠が取れたことは良いことだった事からあまり気にはしなかった。

どちらかと言えば中学生辺りの年齢である二人は年頃の男女で、ユキは嫌でも異性と意識できるユウキが無防備にも寝ていたのだ。

「はあ……」

少し悪戯心が生まれたのか、ユキの指は柔らかかそうなユウキの頬に触れて軽く突いていた。

「……えい」

「ふへへえ……」

女子特有の自分とは違う身体なんだと実感しつつ、ハラスメント警告にならない程度で柔らかい頬を突いて遊んでいた。

「んむ……ふにゃあ……」

「……ふいふ……」

今まで異性と関わるのが少なかった為にユウキという存在を強く意識する。

抱くことがなかった感情が奥底にて封されたはずの、それを。

「可愛い……」

ユキは今までにないほどにユウキに惹かれていた。

今までの自分に接触してきた人間とは違って、ユキの世界を色強くする。

「んう……？ふわああ……」

「あ……」

悪戯心もやり過ぎるのは駄目だと理解しているため、ユウキが起きたと分かると指を引つ込めた。

ユウキも段々と意識がすっかりしてきたのか、目を擦りながらも身体を起こす。

「おふあよ……」

「ん、おはよう」

「わく……ゆきだく……」

声が伸びながらもユウキは身体を倒してユキにもたれ掛かる。
急な動きにユキも対応出来ず一緒に倒れていく。

「わ．．．」

「えへへ．．．暖かい．．．」

ぎゅうつと強く抱きしめられて動けなくなったユキは仕方ないと思いながらもそのままにした。

抱きつかれて嫌と思わず、逆に嬉しいと感じる自分がいたからだろう。
嫌悪感よりも好意の方が強かった。

「ん．．．ユウキ。朝」

「うん．．．」

「駄目、これ．．．」

段々とユウキの抱きしめる力が強くなってきていたので起こそうとするも、寝ぼけているようで起きる気配がなかった。

このままでいいかとユキは諦めて目を閉じてまた眠りについた。

一度目を開けたも、また心地好い眠りへと誘われていったユウキ。

ようやく起きたと思うと身体を起こす際に少し重みがあった。

「あれ?」

「ん・・・」

ぎゅうつとユウキに引っ付いて寝てしまっているユキがおり、ちよつとやそつとじゃ剥がせないと分かる。

ユキとユウキの間にはかなりのステータスの差があるために不可能に近い。

「どうしよう・・・」

ユウキとしては今回聞かなければならなかった話をするために会おうとしたのだが、それも今は本人が寝ているので出来なかった。

キリトやアスナの止めも聞かない形で面談すると言っているので早く切り上げてお

きたかった。

「んむ……」

PKKプレイヤー《黒猫》の正体を知ってしまった自分はこれからユキと何らかの接点が出来てしまう。

己の姿を知る人物だからこそ黙殺するのではないかという不安もあった。

「ユキ、朝だよ」

「ん……にゅ……」

揺さぶりをかけて声をかければユキはすぐに頭を覚醒させる。

「ん……おは、よう」

「うん。おはよう」

「ごめん、なさい。昨日」

ユキは昨日の誤ちをすぐに謝る。

ユウキの触り方があまりにも気持ちの良い物でいつの間にか寝てしまっていた。

「ううん。ボクもやり過ぎたから……」

「ん、それで。昨日、何の用、だった？」

自分になにか話があつて呼び出したのだろうと考えていた。

だがまさかの心地さに寝ていたから聞けなかつた用件だった。

基本的に人を信じない。

それがユキの根底に根付いた物で崩すことが出来ない本質。

だが唯一例外と言えるのがユウキという少女だろう。

「あつ……えつとね、その……」

「何となく、予想、ついてる」

「……そっか」

「攻略組、入りはしない。独断専行。それで、いいなら」

「ホントに？その……良いの？」

「ん……ユウキが、いるから。退屈、じゃない」

照れ臭そうにしつつもユキは考えていた言葉を紡ぐ。

元々ユキは誰かと協力したりするのが一番苦手とする。

誰かに合わせようとする则自分自身の行動が大幅に妨げられて動きにくくなる。

そしていつ裏切りが発生するか分からない疑心状態で戦うのであれば一人で行動す

る方が心身ともに楽に感じてしまっている。

「……うん。分かった。だけど攻略組のみんなには言わないでおくね」

「ん……あり、がと」

「さてつ……ボクはもう行くよ。あまり誰かと一緒にいるとユキが疲れちゃうだろうか

らね」

「別に・・・ユウキなら、構わない、けど」

「そう？なら、ボクと行く？人が沢山いるからユキには辛いかもしれない・・・」

自分の手を離れない程度に握るユキに少し戸惑うも一緒にいていいと分かると共に宿屋を出るとアスナとキリトにメッセージを伝える。

だがユキも一緒とは書かなかつたが。

「ん・・・」

ユキもストレージからローブを出して着るとよく見る《黒猫》としてのプレイヤーに戻る。

「ユウキ」

「んー？」

「・・・好き、だよ」

「ふえっ!?な、ななな・・・何を・・・」

何故か無意識に出てしまっていた言葉。

自分のこの感情が一体何なのかぐらい分かっていた。

生きている上で抱くことがないだろうと思っていた感情を。

下手に伝えず、素直にユウキへと伝えた。

「うにやあああ……」

「ふふ……」

顔を真っ赤にして耳にまで赤が入りつつあるユウキを見て、もし拒まれても意味はあつたと感じれた。

色褪せた世界に強く色を持った少女は一匹の黒猫に少しの時間だけで懐かれてしまっていたのだから。

血に濡れ散る狂い猫

幼い少年としての《黒猫》と。

稀代の暗殺者としての《黒猫》は。

似ているようで似つかない背反する存在。

優しいが表現下手、人に対して臆病で、たった少しの時間だったのにも関わらず恋心を自覚してしまった紺色の少女が大事だと思う一面。

きっかけがあれば殺戮を愉しんでしまう、残酷で惨殺を簡単に行える自分自身。

「・・・ん」

あらゆる殺人術を身につけ、持ち前の天性の才能とセンス。

《黒猫》ユキは、無意識に決めた領域内に入り込んだ物体に対して強い警戒を抱く。

無機物だろうとそれを視界にいれ脳内へと記憶されていく。

生命体であれば、どんな特徴で照合がしやすい部分を重点的な記憶にする。

異常領域とも言えるそれは、例外にも世界に一人だけ適応されない人物もいる。

彼が初恋を抱き、唯一の存在と言える少女。

その少女以外は例外なくゾーン内は警戒が無意識に行われる。

いつからそのような超人的技術を習得したのかユキ自身にも分からなかった。いつの間にか会得し、使いこなしていたから。

どれほどまでに殺すという事に関しては世界で右に出るものは存在しないほどの殺人者でもあり、それ以外が天性の才能によつて退屈としか思えなかった。

だからこそ人を殺すことを愉しんでしまうのだろう。

それ以外の楽しみを知らないから。

「ユウキ……」

もし、これからもユウキという少女がユキの知る範囲で何かあれば。

暗殺者としての残酷なユキが全面的に出てしまい、無差別に攻撃をする人形と成り果ててしまうだろう。

それを止められるのはこの世でただ一人だけなのだから。

とある階層にて、ユキは情報屋のアルゴからとてつもないほど面倒な情報を聞かされていた。

「ユキ坊。耳寄りというよりかなり危険な情報があるんだ」

「・・・そう」

素っ気ない対応をしつつも、その言葉に込められているのは興味がないというもの。本質さえ理解していれば冷酷さは感じれない。

「急にレッドギルドの笑う棺桶の被害例が減って来ているんだヨ。何となく予想はついているけどナ」

「・・・それで」

「近々、残党メンバーの一掃が攻略組メンバー主体に行われるけどナ、ユキ坊にも参加してもらえないかという伝言だヨ」

「・・・面倒」

心底面倒な用件だ、と一蹴しようとするアルゴは待ったをかけてユキを引き止める。

「この掃討作戦。攻略組メンバー殆どが参加するんだけどな。メンバー内には《絶剣》のユーちゃんが入るゾ」

《絶剣》はSAO内では知らぬプレイヤーはいないほど有名になりつつあった。

容姿から見ても美少女で、元気いっぱい自由人。

それでいて攻略組メンバーの筆頭格に入るのだから実力も折り紙付き。

男性プレイヤーからすれば見惚れる、というのも多い。

その名を聞くとユキは少し興味を示した。

「……単独、参戦。攻略組には、参戦を伝えない。それなら、渋々」

「……ユーちゃんには伝えなくて良いのか？」

「ん……別にいい。余計に、心配させる、だけ」

アルゴはそれ以上何も言わなかったが、ユウキという少女の性格を知っているから、同情をすると同時に寂しさを覚える。

ユキともこうして関わっていくと分かるのは、自分自身を見て欲しいという欲求があるが、生きたいという欲がなかった。

それをユウキが理解したときどうなるのだろうか、気になってしまう。

未来に対して何も抱かない。

生きることが諦め、今を感じている。

そんな生き方をするユキはいつか死んでしまうだろうと。

「……ユキ坊」

「ん……？」

「……もつとユーちゃんを信じてあげるべきだよ」

それを聞くと、ユキは少し困った感じをしながら立ち去った。

来るべくやってくるオレンジ及びレッドプレイヤーの掃討作戦。

犠牲者を出すかもしれないこの作戦。

「ユキ坊、ちゃんと生きないと……ユーちゃんが悲しんじゃうぞ……」

長い付き合いだからこそ、ユキの壊れた本能も分かってしまった。

弟のように感じれる少年にそんな悲しい人生を歩んでほしくなかったアルゴの願いは届くのだろうか。

カチャカチャと。

武器同士が擦れ合う音が鳴る。

音を出しているのはPKKプレイヤー《黒猫》ユキ。

「作戦、開始！」

「！！！！うおおおおお！！！！」

SAO内第七十三層、迷宮区。

PKプレイヤー掃討作戦は既に開始されており、参加メンバーは互い互いにPKプレイヤーと戦闘を始めていた。

「・・・見つけた」

ユキは目的のプレイヤーを見つけると他のプレイヤーなぞ目に入らないと言うばかりに突っ込んでいく。

その姿をかううじて黙視できたプレイヤーはギリギリのところまで回避をする。

「ちい！くそが！」

「・・・戦闘論理、変更。戦闘手段の最適化・・・」

機械的な喋り方になりながらも的確に目標を殺そうと愛刀を突いては振りかざす。軽く掠った、その手応えを感じるとユキの口角が上がる。

「このくそガキ！」

「あはっ……」

狂気に等しい殺人衝動でありながら、正確に冷静な判断力は欠けるところかどンドン洗練されていく。

まるで相手の戦い方を理解しているように。

「くそが、くそ、くそ……クソクソクソクソクソ、くそがあー！」

「……」

「なんなんだ、てめえは！ 苛々するぐらいにしつこえ！」

「お前だけは殺す、絶対に」

「……まさか、お前」

絶対的な執念。

殺すまでは手を止めない意志。

だがユキの声を聞いた瞬間、驚愕した表情へと変わる。

何かに怯えるように。

「は、はははははははははははははははは！ まさかお前もやっつてるとはなあ!? 思わなかったぜえ!？」

「……うるさい」

人間的な感情を見せながらも、ユキは致命傷となる頭、胸、腹、を狙うが外れる。「俺をわざわざ殺しに来るとは、こりゃあ傑作じゃねえか！」

標的とユキ以外は決着がついたのか、二人をじつと警戒しながらも見ていた。いつでも手出しができるよう。

「……ユキ?なん、で……?」

掃討作戦に参加したメンバー。

当然ながらもユウキも入っていて。

ユキが参加していると知らなかったことに驚いていた。

だが手出しはすれば何があるか分からない。

あの時ユキの戦闘能力を知っているながらも心配にしていた。

「でえ……?なんのためだあ?俺を殺しにきたのはよお!」

「……理由?」

問われ、そしてその問いがユキに理解できなかった。

何故なら。

「そんなもの、存在しない。殺す事に理由は不要」

常人には理解できない考え。

誰かしら殺人には抵抗を覚える。

なのにも関わらず、ユキにそれはない。

「説明、したよ？だから、死んで？」

子供がねだるように。

玩具で遊ぶようにユキは懇願する。

「く、はははははははは！さいっこうだよお前は！」

「無明剣」

ただ紡ぐ。

魔法のような出来事にも見えただろう。

言葉だけを発しただけで標的のプレイヤーの両腕は斬り飛ばされていた。

「いいねえ、いいねえ！さあ、殺せ！創造主たる俺を殺すが良い！それでお前は完成する

！」

「狂花」

また紡ぐ。

両脚は捻れ、そして斬り飛ばされる。

システムのダメージではないはずなのにも関わらず、何故か相手のHPは削れ、部位

欠損が発生していた。

「俺の最高傑作たるお前が完成すれば！俺はもう無能じゃない！俺が死のうが！お前が勝手に己の行動原理に基づいて殺戮するのだから！」

「・・・死ぬ、屑が・・・」

吐き捨てるように心底うんざりする。

だが確かにこの人物を殺せば自分自身は殺戮者になるかもしれない。

暗殺者としての類い稀なる才能は殺すことで育っていたのだから。

「ユキー！」

「・・・断命剣」

ユキがもう眩いた頃には。

プレイヤーの背後に立っており。

鞘からは抜かれた刀がユキの右手に。

そして、目視では確認できなかったほどの速さで。

頭、胸、首、腹。

四箇所を斬った切断痕と、斬り飛ばされた頭部が宙を飛んで破片となつてアバター体ごと砕け散った。

「・・・ふっふっ・・・」

どこか自分が自分じゃなくなる感じ。

ふわふわとした感覚は意識の塗り替えなのだろうと。

「ユキっ！」

ぎゅうつと誰かに抱きしめられる感覚。

とても心地好く、暖かい温もりが。

ユキには嬉しかった。

ちゃんとユキを見てくれる。

それがとてもとても嬉しくて。

「ゆ、うき？」

「うん！うん！」

「あ・・・た、たかい」

ユキのアバター体は光っていた。

神々しく、だがそれは誰もが知るエフェクト。

「も、つと。いつ、しよが。よかつ、た」

「うん・・・！うん・・・！」

泣きじやくりながら、ユウキはそれに答えた。

大丈夫だよ、と。

安心してくれるように。

「や、だなあ」

「ボクも……！やだよー！」

「あ、はは……」

ユキのアバターの体のエフェクトが最高潮に達したとき。

ユウキの耳元で頑張つて出した言葉。

それを伝えると、破片となって砕け散つた。

S A O内ではアバター体が破片となって消えるのはHPが0になるか、現実世界での死亡。

「あ……」

パリン、とあつけなく。

ユキの身体は無くなつてしまった。

「あああああああ!!」

それを理解してしまったユウキは我慢など出来なかつた。

好きだと告白されて、伝えたかつた言葉を。

ユウキにそのチャンスが巡る前に失くなつてしまった。

「ユウキ……」

「……この場は私が処理します。今回の掃討作戦、犠牲者……一人。お疲れ様……」

でしたっ……」

オレンジ及びレッドプレイヤー掃討作戦。

SAO攻略組メンバーと協力者一名によって行われた作戦は。

PKKプレイヤー《黒猫》の犠牲で幕を閉じる。

「ユキい、ユキい……嫌だよ！ボクを、独りに……しないでよお……」

ユウキの悲痛な叫びは。

キリトとアスナにはどうしようもなかった。

初めてユウキが泣いたその現場。

しばらくして泣き止むと、ユウキはふらつと立ち上がる。

「……ごめんよ、心配かけちゃったね」

普段通り笑いかけたつもりなのだろう、ユウキの表情は。

笑っていても、目に光が映っていないかったのだから。

独り淋しい黒猫

ピピ、ピピ、と電子的な音が部屋で鳴り響く。

天井は真つ白で、蛍光灯の光が全体を照らしていた。

「ん……あ……」

稀代の暗殺者はまだ、死なない。

事前にSAOをプレイするための機器を精査し、ゲーム内での死亡時に発される信号を一部遮断するよう組み替えていた。

「あ……ぐ……」

殆ど寝たきりの体勢のままだったからか、著しく身体能力が落ちていると理解する。身体を動かそうにも全くといっていいほど動かない。

「……はあ……」

病院内であるのは理解できている。

だが自分だけが帰ってきてしまおうと色々とまずい状況だとも。

何故自分だけ帰ってきているのか、その説明がつかない。

してしまえば国家として大きく問題になっている為に方法の樹立、その解明まで付き

合わされかねないと。

「……ん、しよ」

茅場晶彦の協力者としてこの計画に入り、彼の目的も理解していた。

だからこそその内容を教えるには惜しい。

ドタバタと病院内が騒がしく感じる。

日本屈指の大財閥であり、世界的な関わりを持つ釘家の人間の帰還はひっそりと関係者に伝えられていった。

雪がSAOから帰還し、数ヶ月してSAOのクリアが公表。

帰還者も戻ってきていたが、そのうちの数百名は何故か昏睡状態から目を覚まさない状態となっていた。

その原因究明をするべく、雪の元にとある役人が訪れていた。

「やあ、こんばんは」

「・・・」

「つれないねえ・・・君と僕の仲じゃないか」

「・・・そう」

腹に一物抱えているとしか思えない腹黒さを持ち合わせる役人。

総務省通信ネットワーク内仮想空間管理課職員。

菊岡誠二郎というこの人物を雪は信用どころか、警戒心でしか見ていなかった。

「まあ、いいや。それで今回君を呼び出したのはね、SAO帰還者たる一人だということ、何故未だに未帰還なのか。それを知りたいんだ」

「・・・そ」

「君はもう分かっているのだろうか？何故未帰還なのかを」

どこからそんな確証を持って自信満々なのか、と雪は思いながらも事実、その理由は分かっていた。

「・・・情報に見合う、金額。用意は」

「勿論、用意してあるよ」

「はあ……3000。それで、教える」

雪のこの取引はしなければならぬ。

菊岡にとつて雪という人物は警戒に値するが、今回のSAO事件によつて引き起こされた顛末や真相を知る人物であり、その情報は確かだと。

だが信用はマイナスであり、欲しいのなら見返りという形での取引でないと応じないとも分かつていた。

「うぐ……中々だね。だがそれに見合う、ということかな？」

「……別に」

面倒だと思ひながら、雪は鞆からファイルに纏めた紙を菊岡へと放り投げた。

その正体は、SAO未帰還者を帰還させるための情報。

「……これは……本当かい？」

「……信じないなら、勝手に、して」

菊岡が目を見張つたのは、その内容。

どれもが裏付けるための理由と内部様子。

それらは中を見なければ分からないだろう情報も。

ペラペラと素早く、だが重要な情報は見逃さない。

そして菊岡は元凶となる物を見た。

「レクト?」

レクトとは、大手企業の一つでフルダイブ関連の仕事も持っていた。

VRはナーヴギアを使用せず、安心安全を求めて作られた新たなフルダイブ機器を用いて遊ばれていた。

セキュリティ性やセーフティ機能を付けて、強制ログアウト機能も付けられたVR機器アミューズファイア。

件のアミューズファイアを用いて今世界でかなりの数を売り上げているソフトの運営を《レクト》社が行っていた。

「・・・潰そう、か?」

ただの提案。

菊岡の動揺と、その裏で行われていた計画や内容。

それを知つての、雪から告げられる提案。

言葉にするのは簡単だが、雪にはそれを容易く行える権力も実力もあった。

「・・・いや、これは僕の方で伝えよう。釘宮に手を貸してもらった、など言えば世界的批判が来そうだ」

「・・・ふーん」

釘宮家現当主である釘宮くきみや雪ゆき。

その実態は年齢15歳の少年。

日本屈指であり、世界的財閥の釘宮当主として生き、表舞台に殆ど顔を見せないものの強い影響力を持つ。

裏では稀代の暗殺者として、様々な殺人術を身につけ、釘宮に関わろうとした者を悉く暗殺した経歴持ち。

「……じゃ、早く出て？」

「そうさせてもらおうよ。君の家は生きている心地がしない」

菊岡は姿を見せず、気配を感じさせない影に冷や冷やとしながらも雪と別れた。

「……はあ」

菊岡が立ち去ったことが分かると、雪は身体の力を抜く。

菊岡が言ったように、雪がいま住んでいる屋敷とも言える家には無数の影が潜んでいる。

そのどれもが釘宮に仕え、当主でありな汚れ仕事をする自分達にも変わらず接してくれる雪という人物にも心から仕えていた。

「ん……出掛ける」

誰もいない空間に一人呟くと、どこからか感じる気配が移動する。

たとえ雪が許していても、影はその姿を見ようとはしない。

まだ成熟しきっていない身体でありながら人を惑わせる色香を醸し出していた。

今ではその誘惑もただ一人の少女だけにしか向かなくなっており、SAO内で雪に影響があつたのだと影は気付いていた。

だがそれを指摘はしない。

本人が喋ろうとしないのならば、それに対して口出しは無用だった。

「ん．．．？」

プルプルと誰かから電話が来ていた。

雪の個人携帯に直通で電話をかけられるのはごく限られた者のみ。

殆どの人物は釘宮としての携帯にしかかけられない。

「．．．はい」

『ええっと、SAO帰還者のユキさんで合っていますか？』

何故分かったのだらうかと考える。

あの場で分かっているのは確実に自分自身は死んだと思われている。

ならばこの電話の人物に本人と伝えるのは危険だと感じた。

「．．．いいえ」

『そうですか．．．ごめんなさい。変な電話をしてしまつて』

「はあ……」

『人違いだったので……。では失礼します』

電話越しに聞こえた音。

声色は女性で大体高校生辺りだと仮定。

ユキというプレイヤーを知っているのは少しだけなので絞り込むのは簡単だった。

「……《閃光》のアスナ」

雪も知っており、結城家のご息女だと記憶している。

本名は結城明日奈で、SAO未帰還者の一人だと。

「……椿」

少し面倒だと思いつつ、雪は仕える影を呼ぶ。

「はい、こちらに」

「……結城、明日奈。なんで、電話したのか。調べて？」

「承知しました」

用件を承ると椿はすぐに姿を消してどこかへ去ったと気配で察知していた。

雪の外外じみた能力はここでも発揮されている。

「んしょ……」

さっさと着替えてしまうと、影に屋敷を任せて出ていく。

行き先は行き慣れた喫茶店へと向けてタクシーを拾うと車で行った。

初恋少女は色恋染まる

外出して拾ったタクシーにて移動すること数十分。

雪は行き慣れた喫茶店へと到着する。

寂れた感じで知る人は知る名店であり、雪は店主ではなく店主の妻の方がマスターを
しているときにいつも行っていた。

「ん……？」

店内に入ろうとすると、営業時間なのにも関わらず扉が閉まっていた。

ここで考えても仕方ないと判断すると店の裏側へと回る。

裏側の扉を強めに3回叩くと、ガチャガチャと鍵が開く音が聞こえた。

「なんなんだ、まったく」

扉が開かれ聞こえるのは男性の声。

その容姿を雪は見たことがあった。

S A Oの時に雪がアイテムを売りに行った店。

その時はユウキへと売ってしまっただが、店の店主だった本人が今雪の目の前にいた。

「ん……」

「子供？なんでここに？」

「・・・お店、空いてない？」

「ああ・・・店か。今日は貸出なんだ」

「・・・そう」

ゆつくりと出来る一つの場所であったために、空いていないと分かると雪は落胆した。

「あー・・・貸出人達と一緒にいいなら入るか？」

「ん・・・いいの？」

「ああ、あいつらなら構わないだろ」

「・・・じゃあ、お邪魔、します」

しっかりとお礼を告げると感心したようで、頭を撫でられていた。

「ぬ・・・」

「子供の癖して礼儀正しいな」

「・・・別に。普通」

そう、雪にとつて普通なのだ。

釘宮家当主として立つことはあるために、礼儀作法は完璧にマスターしている。

警戒している相手だろうと、見知らぬ他人だろうが、礼儀は尽くすべきだと考えてい

るのが雪の考え。

「おおい！エギル！酒だ！」

「はあ……」

エギルと叫んでいたことに店主が反応していることから、この人がそうなのだろう。

「まあ、ゆつくりしていつてくれ」

雪は中へと入ると、厨房なのだろう場所へと移動する。

何度かこの中には入ったことがあるため、雪は構造を一階なら覚えていた。

そのまま、裏方の場所から表へと出ると雪は中にいた人物に驚く。

「あ……」

SAO攻略組メンバー。

その筆頭格である人物が何人もいた。

血盟騎士団副団長《閃光》アスナ。

ソロプレイヤーでありβテスト経験《黒の剣士》キリト。

ギルド『風林火山』のギルドマスターであるクライン。

中層プレイヤーでありながら、モンスターテイマー《竜使い》で手堅い実力者のシリ

カ。

そして、雪の初恋の相手でもあり、《絶剣》で名が通っていた少女。

「へっ……?」

「……っ」

「な、なんで」

ユウキが雪の姿を見つけると、わなわなと震える。

「ユウキ? どうかしたの?」

「ゆ、ユキ……だよね?」

ユウキは絶対に間違えない為に確認した。

聞かれた雪をじつと観察するように二人を見守っていた。

ここでどう答えるか、それで雪とユウキの関係は変わる。

だが雪は世界的財閥である釘宮の現当主。

世界中で雪と密接な関係を持ちたい人物は多く、それゆえに吐き気がするほどの令嬢

や令息と会ったりもする。

「……」

「答えてやらないのか」

普通の生活を営む人は知らなかったりすることの多い釘宮の名を。

ここで告げるべきなのかと。

ユウキのことを知らないと言えはこの緊迫感は無くなるだろう。

だが、それは雪の初恋を終わらせる意味でもあった。

どれほどの時間が経ったか分からない、そんな感覚がしながらも。

雪は覚悟を決めて告げた。

「ひき、しぶり。ユウキ」

そうユウキに告げた瞬間。

椅子がガタツと動き、ユウキが力強く雪に抱き着いた。

「ユキ・・・ユキ・・・！」

雪が見たことないほど大泣きしたユウキを優しく抱きしめた。

少しすれば、泣きつかれてしまったのか、雪へと身体を預けて寝てしまっていたユウ

キを見るとどうしようかと悩む。

「ん・・・どう、しよう」

「あ、ああ・・・個室にベッドがあるからそこに寝かせるといい」

「じゃ、お借り、します」

軽々とユウキをお姫様抱っこすると雪は個室へと入る。

この場所も雪が知る部屋で、時折入ったりもしていた。

「んしょ・・・」

寝てしまったユウキをベッドに寝かせると毛布をかけて部屋を出て行った。

「ねえ」

「ん・・・」

「どういうことか、説明してもらえないね？」

「・・・いい、けど」

雪は長引きそうな気がしたので、電話で屋敷にて待機している影にかけた。

『なにかございましたか？』

「ん、少し話す。帰るの、遅くなる、かも」

『お食事はどうなさいますか？』

「・・・作ってて」

『承知致しました』

誰と話しているのか分からない一員は内容も想像出来なかった。

電話が終わると椅子に座った。

どういふことなのか話すために。

「なに、話せば、いい？」

「まずあんたが何者なのか。それからだ」

「ん・・・《黒猫》ユキ」

「本名は？」

「・・・関係、ある？」

雪の言い分におかしな点はない。

SAOでの名前が分かればいいはずなのにも関わらず、本名まで聞くのは変だと。

「・・・ある人物にユキの本名を聞いたら何故か洩られたんだよ」

ある人物というのは恐らく菊岡だろうと推測する。

確かにある程度の地位に立つ者なら洩るだろう。

釘宮に手を出せば、出した側が潰されたなどゴミのように存在する。

日本政府としても釘宮とは対立したくないのだろう。

ゆえに本名が聞き出せなかった。

「・・・釘宮、雪」

「釘宮って、あの？」

「ん・・・」

さすがに結城家の人間ともなると知っていたようで、かなり驚いていた。

だがクラインや、エギルといった一般人は理解できない。

「釘宮家の人間なんて始めてよ・・・」

「アスナ、釘宮って何なんだ？」

「和人君は知らなくて当然よ。なんなら殆どの人が知らないんだから」

アスナの大袈裟のようにも思える態度。

だがそれは真実だからこそ、為せていた。

「釘宮っていうのは、世界的財閥で、日本屈指の大財閥。私もお母様からよく聞かされていたの」

そんな人物が今ここにいると思わなかった一員はそれはそれは驚く。

人一人を簡単に消せる存在なのだから。

「ん……」

居心地が悪くなるのも感じながら、席を立つとユウキを寝かせている部屋へ向かう。ガチャリと扉を開くと、ユウキが起きており、不安そうに雪を見ていた。

「ユキ……」

「ん……?」

「……えへへ」

雪を姿をちやんと見ると安心したのか、少し笑った。

そんな様子にくすつと雪は笑いながらベッドの縁に座り、中を見に来たアスナ達に向かいながら告げた。

「……釘宮、雪。よろしく、ね」

ふにやつと笑う。

その笑顔をユウキへも向けると、一瞬にして赤くなっていた。

「うう……」

「ユウキちゃんにもとうとうね」

「名前、教えて、欲しい」

退院後、雪はSAO参加者の名前を殆ど調べつくしており無論、ユウキの名前も知っている。

だが本人から教えてほしいという欲があった。

「紺野、木綿季……です……」

「ん、よろしく。木綿季」

「まあ、なんだ。終わりよければって奴だな」

「なんだそりゃ」

「雪君、まだお時間あるの?」

携帯で時間を見てみるとそこそこいい時間になっていた。

帰る時分としてはちょうどいい感じだったが、木綿季ともつといたい雪はまだ少し居たかった。

「ん……どう、しよう」

「そろそろ、ボク帰らなきゃなんだけど……」

「え……」

だが木綿季の帰宅宣言を聞いてしまった雪は寂しく感じた。

「う……遅いと姉ちゃんが心配しちゃうから……」

「お泊り、でも、いいよ？」

「わーお、積極的。この際泊まっちゃえば？」

「ええっ!?で、でも……」

悩みに悩む木綿季だったが、決めたのか携帯を取り出して電話をかけた。

「あつ、姉ちゃん？」

電話の相手は木綿季の姉だったようで、雪はどうなるのか待っていた。

雪の聴覚だと電話の声が聞こえてしまっている為にどうしようもないのだが。

『木綿季?どうしたの?』

「お泊りしてもいいかな?」

『ええっ?きゅ、急ね?』

「うん」

『泊まりは良いけど……男?』

「……ち、ちがうよ?」

『……今いるなら変わってちょうだい』

木綿季の苦手な部分こそ、自身の姉。

一緒に過ごしている為に木綿季の動揺の仕方などで嘘がばれやすかった。

「雪……姉ちゃんんだけど……電話いいかな？」

「ん、良い」

雪は携帯を渡されると電話を変った。

「ん……変わり、ました」

『あなたが木綿季の彼氏？』

「は、い」

『そう……木綿季の事知ってるの？』

「……具体的、には」

『最近でもいいわ』

雪は簡単に、だが具体的に木綿季の姉へ話した。

内心ビクビクしていたからか、喋ると優しい性格だと分かり、ホツとしていた。

『なるほどね……』

「……はい」

『あの子、SAOから帰ってきてからもずっとぼーっとぼつかしててね。理由を聞いても教えてくれなかったの。だけれどね、さつき電話をかけてきたとき、普段と声色が

違ったの。良いことがあったんだろうってね』

「・・・はい」

『あなたの家に泊まるのは構わないわ。ただ木綿季の事をしっかり守ってちょうだい』

「わかり、ました」

『それと、後日でいいわ。家に来なさい。相手になってあげる』

それだけを告げるとぶつつと電話が切れた。

携帯を木綿季へと返すと、一息つく。

「ど、どうだった?」

「ん・・・構わない、って」

「ホント!? やったあ!」

「お迎え、呼ぶ、ね」

さすがにタクシーをその辺で拾うわけにもいかないの、雪は迎えの電話をかけた。

『どうかなさいましたか?』

「ん・・・お迎え、お願い」

『かしこまりました』

「あと、ご飯、二人分と、客室も」

『どなたか来られるのですか?』

「ん……特別な、人」

『分かりました。手配しておきますので、しばしお待ちください』

木綿季もなんとなく聞いていたようで、終わると雪をぎゅうつと抱きしめた。

どうやら木綿季の姉との電話中に他は帰っていたので、人の目を気にすることなくいちゃつめた。

「あ、う……」

「ん……雪、暖かい……」

「お迎え、呼んだ。すぐ、来るから、行こう？」

「うう……分かった」

渋々雪を離すと、手を繋ぎながら部屋を出た。

「やっと終わったか」

「うん！色々ありがとう、エギルさん！」

「他の奴らはもう帰ってるぞ。このまま今日は閉店する」

「はい。それじゃまたね、エギルさん」

「はいはい」

カランコロンと、良い音を鳴らしながら店の扉を開けて出ると外にはいつの間にか迎えの車が来ており、影の椿が待っていた。

「お迎えに上がりました、雪様」

「ん．．．お家、帰る」

「はい。そちらのお嬢様は．．．？」

色々と察した椿も聞いておいたのが良いかと思いき雪へと聞いた。

先程の電話で特別な人と雪と手を繋ぐ少女で、雪の彼女だと分かっていたが。

「ん．．．好きな、人」

「え、えつと紺野木綿季といいましょ．．．」

「ふふつ．．．もつと力を抜いていただいて構いませんよ？」

「木綿季、可愛い」

「うにゃああ．．．」

木綿季の嘴みを二人で指摘され、恥ずかしさで顔を真っ赤にする木綿季。

そして雪は椿に開けられた車内に木綿季を入れると自分も入った。

「では、参ります」

自分の主人の色恋を見れて満足した椿は、上機嫌で車を走らせて行った。

紫紺の黒猫

釘宮の屋敷へと到着した三人。

だが、木綿季は出ようとするも動けない状況下にあつた。

「あ、あの」

「はい？ どうかありませんか？ 木綿季お嬢様」

「雪が、その……」

木綿季が戸惑う中、雪は木綿季の膝を枕にして寝てしまっていた。

「雪様が我ら以外に、そのようなお姿をお見せになるとは……」

「え、えつと……」

「差し支えなければ、木綿季お嬢様が雪様を抱いて頂けませんか？」

「は、はいっ」

寝ている雪を起こさぬよう、木綿季はゆっくりと抱き上げる。

雪の年齢では考えられないほどに軽く、木綿季でもそこまで重くないと感じれた。

「んしょ……」

「んう……」

椿が木綿季を案内しつつ、部屋割などを説明する。

「それと木綿季お嬢様。雪様とご一緒がよろしいでしょうか？」

「一緒というと・・・部屋ですか？」

「はい」

「ええつと・・・」

木綿季としては一緒が良いものの、これほどまでに巨大な屋敷に住んでいることから雪は一般人ではないと分かってしまった。

そういう人は婚約もしていない男女が共を一緒にはしないと聞いたことがあったのだ。

「我らとしては雪様の特別な人と聞きましたので。今までそのような相手は聞いたこともお選びになったこともございませんでしたから」

「そうなんですか・・・」

「嬉しいのですよ？雪様がお選びになった木綿季お嬢様は唯一の存在ですから。雪様の中ではご結婚まで視野に入れてあるかと」

「け、けけ・・・結婚・・・」

そこまで考えていたと思わなかった木綿季は、その言葉に顔を赤くすると同時に、そんなに想ってくれているのだと感激する。

「釘宮家の現当主である雪様には、跡継ぎが今ございません。そのため養子という形になるかと思っておりますが・・・」

「・・・雪は・・・」

「現当主である雪様がもし、釘宮を捨てるといふのなら本気で潰されるでしょう。元より雪様は贅沢尽くしの生活は苦手な方でしたから。将来ごくごく普通の家庭を築きたいとよく聞かされましたよ」

ふふつと椿は笑うと部屋に到着し、木綿季達を中へと案内すると立ち去った。

部屋で二人きりにされた木綿季は、頭の中で聞いた内容を思い返していた。

「・・・ボクが・・・」

木綿季と雪が関わるきっかけとも言えたのは、SAOで偶然にも雪の姿を見つけて追いついたことだった。

それから関わりを持つようになり、たった少しの時間だけで雪に懐かれてしまった。

「んむ・・・う・・・?」

「あ・・・雪?」

「ん・・・にゃあ・・・」

見知らぬ相手には威嚇という名の警戒を。

信じるに値する相手には甘える姿を。

まるで猫みたいだな、と木綿季は思った。

「えへへ．．．可愛い．．．」

「んう？」

寝ぼけている雪は木綿季だと分かると頭をお腹へスリスリとする。

くすぐつたい感覚を覚えながら木綿季はその頭を優しく撫でていた。

「ねえ、雪」

「ん．．．？」

「ボクね。雪の事、大好きだよ」

素直に雪へ告げるとポツと頬が朱く染まっていた。

「う．．．」

「照れてるの？可愛いね、雪」

「む．．．」

だがずっとやられっぱなしの雪ではない。

木綿季の耳元でふうつと息をつく。

「ひにやつ」

パクツと木綿季の耳を甘噛みしながらも、ぼそつと呟いた。

「僕も、木綿季の事、大好き」

色っぽい声で木綿季に言うのとそれ以上は木綿季が耐えれなくなったのか、顔を真っ赤にしながら隠していた。

「大好き。愛してるよ」

「ふにやあああああ．．．あううう．．．」

ぷしゅーつと蒸気が出るのではと思えるほど木綿季の頭は沸騰しており、追撃するように雪は耳元で愛情表現の言葉ばかり囁く。

釘宮の当主である雪。

その唯一の存在になれた相手は、それはそれはドロドロに甘やかされる。

そして釘宮雪の代で、釘宮家は社会から手を引いた。

木綿季と同等の相手になるためだけに、社会的地位を捨てて庶民へと成り下がった。だが釘宮の築いた富は雪の物となった。

それには出来るかぎり手を付けていない。

これは一匹狼だった黒猫が天真爛漫な少女に惹かれた話。

生涯、黒猫は少女にのみ目を向けた。

少女以外の女性など興味がないと告げるほどに。

結婚式を挙げて、新婚の時期が過ぎようとも知る人は言った。
ずっと、二人は幸せそうだと。

万年新婚夫婦だと関係者達は言う。

「木綿季。大好き」

「ボクも！雪の事だーいすきだからねっ！」

以後、彼らは普通の家庭を築いた。

時折、釘宮の屋敷では仲の良い夫婦と4人の子供の姿が見える時があるのだという。